

財団法人 鳥取市文化財団 10 周年記念

仁風閣の樹下美人

石谷 孝二 加彩テラコッタ展

ISHITANI Koji Exhibition
2010.10.1 Fri. ~ 10.17 Sun.

国指定重要文化財 仁風閣



仁風閣前景

あいさつ

財団法人鳥取市文化財団10周年記念として「仁風閣の樹下美人―石谷孝二 加彩テラコッタ展―」を開催いたします。

石谷孝二は国画会を中心に活躍する現代具象の彫刻家です。

今回の展覧会は洋館建築「仁風閣」の館内を森に見立て、各部屋、廊下、バルコニー、螺旋階段等のそれぞれ最も適したと思われる位置に「現代の埴輪」ともいべき女性胸像等のテラコッタ作品を配置しています。

素焼き(テラコッタ)に淡い彩色(加彩)を施すことで瀟洒な館内内部との親和性をはかり、粘土の持つやわらか味のある現代具象彫刻像によって魅力的で新鮮な空間を作り出すことを目指しています。

フランスルネサンス様式を基調とした白亜の明治建築の歴史ある建築空間と現代の彫刻作品の融合により、文化的資源の新たな可能性を広げる機会になるものと考えます。

本展開催のため、ご協力いただいた関係各位にたいし、心からお礼を申し上げます。

2010年10月

主催者

財団法人 鳥取市文化財団 10 周年記念

仁風閣の樹下美人

石谷 孝二 加彩テラコッタ展

ISHITANI Koji Exhibition
2010.10.1 Fri. ~ 10.17 Sun.

国指定重要文化財 仁風閣



1. 鳥の歌



オープニングセレモニー／ヴィオラ演奏・眞家利恵氏



2. 赤い花





3. 花の譜





4. 木漏れ日



4. 木漏れ日



5. 樹下美人





6. 樹下美人





7. 樹下美人



8. 湖山池の虹



9. 久松山の月





10. 記念日



オープニング／ギャラリートーク



11. 帽子



12. 白の光景



13. 風の譜



14. 花の譜



15. 山月



16. 青い鳥



17.少女



18. 樹下美人・春夏

19. 樹下美人・湖畔

20. 樹下美人・秋冬





レクチャー／粘土による公開制作

石谷 孝二 ISHITANI Koji

- 1952 北海道留辺蘂町(現・北見市)に生まれる
- 1973 国展初入選 以後連続入選(東京都美術館)
- 1975 岩手大学 教育学部特設美術科卒業
- 1976 国展彫刻部秋季展「奨励賞」(東京・三越本店)
- 1977 愛知県立芸術大学 大学院修了
- 1978 文化庁主催 県展選抜展招待出品(東京都美術館)
- 1979 第53回国展「国画賞」・会友推挙 (東京都美術館)
- 1983 第57回国展「会友優作賞」・会員推挙(東京都美術館)
- 1984 ふれあい彫刻展 出品(～85)(新宿NSビル)
- 1985 現代日本具象彫刻展(千葉県立美術館)
- 1989 「IMAGIN 89」に出品(ロサンゼルス・ギャラリーDEN)
- 1990 東京芸術大学において文部省派遣内地研修
- 1994 第29回 昭和会 招待出品(銀座・日动画廊)
- 1997 「チェリーロード・モニュメント」(石彫)共同制作 (島根県・島根町)
- 2000 第1回 桜の森彫刻コンクール「優秀賞」(秋田・井川町)
- 2003 鳥取県教育表彰
- 2004 ブロンズ・モニュメント「大河追想」設置 (大韓民国・春川(チュンチョン)教育大学内彫刻公園)
- 2005 砂像彫刻「大地——対話」プロデュース・制作(鳥取市)
- 2007 「海と空と」 角護・石谷孝二 (米子市美術館・倉吉博物館・鳥取県立博物館)
- 2007 ブロンズ・モニュメント「児嶋幸吉翁」設置 (鳥取市)
- 2007 鳥取市文化賞
- 2010 ブロンズ顕彰碑「遠藤薫像」設置(鳥取県立聾学校)
- 2010 「仁風閣の樹下美人—石谷孝二 加彩テラコッタ展—」(鳥取・仁風閣)
- 現在 国画会会員 日本美術家連盟会員
鳥取大学教授・地域学部附属芸術文化センター長

作品リスト



1
鳥の詩
H43cm



2
赤い花
H44cm



3
花の譜
H40cm



4
木漏れ日
H43cm



5
樹下美人
W50cm



6
樹下美人
W100cm



7
樹下美人
H38cm



8
湖山池の虹
W52cm



9
久松山の月
H42cm



10
記念日
H43cm



11
帽子
H46cm



12
白の光景
W40cm



13
風の譜
H43cm



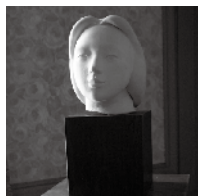
14
花の譜
H43cm



15
山月
H58cm



16
青い鳥
H39cm



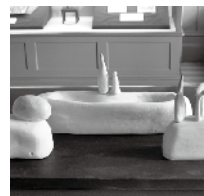
17
少女
H40cm



18
樹下美人・春夏
W40cm



19
樹下美人・秋冬
W40cm



20
樹下美人・湖畔
W40cm

(1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・13・15・17・18・19・20／写真撮影：水本俊也)

会場パネルより

吸着生と可塑性そして粘性を持ち、熱すると焼き固まる不思議な粒子の集合体、子供の時に体験した粘土で形を造る頼りなさは、今ではむしろ思いがけない形を導く自由で、自在な表現の幅を広げる頼りになる素材となった。暖かで親しみやすい色と肌触り、粘土の持つ素朴で自由な性質を私は今、心ゆくまで楽しんでいる。

「テラコッタの魅力」 石谷孝二
日本海新聞「潮流」2009年6月22日より抜粋

私は自然と人の関係性の中に生命の交感を求め、樹木のほかに花や鳥や月や雲や湖の形を借りて独自の造形を試みてきた。どの作品も具体的なイメージを象徴的に創作しながらも写實的に写し取っているわけではない。再現描写に向かわないのは造形の象徴化や抽象化のほうがより深く形に込めた意味を表現できると思うからである。

樹下美人のテーマは古くて新しいテーマである。自然と人が深く結びつく新しい具象表現が現在にこそ必要なのではないだろうか。私は再び、現代の樹下美人像を新たな気持ちで追求しようと思っている。

「樹下美人」 石谷孝二
日本海新聞「潮流」2009年7月7日より抜粋

そして私の方向性は本当に自分の内部から出てきた形、日本人としての形を模索することにあると強く思うようになった。現代の彫刻として「自然の生命的構造」の中に追求すべき主題が隠されていることを意識するようになり、主題の範囲は人体を超えて広がっていった。

作品の中には鳥が現れ、やがて樹木や月や雲や虹が加わり、「自然の生命的な構造」として湖や山も主役として現れてきた。簡略化された湖や山なみは普段の日常の観察とそのかわりから自然に生まれてきたものだ。森羅万象の中に生命の営みを見る嗜好性が私の中の奥深いところに潜んでいるようだ。

「いのちのかたち」 石谷孝二
日本海新聞「潮流」2010年1月22日より抜粋

彫刻創作の現場から 《仁風閣の樹下美人の章》

地域学部附属芸術文化センター 教授 石谷孝二

仁風閣は国指定 重要文化財のフランスルネサンス様式を基調とした白亜の明治建築です。館内では鳥取・池田家ゆかりの品々等を展示し、一般公開されています。平成22年10月1日から17日の間、仁風閣を会場に個展「仁風閣の樹下美人—石谷孝二 加彩テラコッタ展」を行います。

この企画は財団法人鳥取市文化財団10周年記念として仁風閣主催で開催されるもので女性胸像10点（高さ約45cm）のほか鳥、花、月などの立体作品総数約20点のオリジナル新作テラコッタ作品で現代の樹下美人像のイメージを演出するものです。素焼きに淡い彩色（加彩）を施すことで瀟洒な館内内部との親和性をはかり、粘土の持つやわらかい味のある具象像によって魅力的で新鮮な空間を作り出すことを目指しています。

洋館建築「仁風閣」の館内を森に見立て、各部屋、廊下、バルコニー、螺旋階段等のそれぞれ最も適したと思われる位置に女性胸像テラコッタ作品を配置し、歴史ある建築空間と現代の彫刻作品の融合空間を作り出したいと思えます。

美術館や博物館のホワイトキューブとは異なった生活空間に具象彫刻を設置・展示することにより鑑賞者に仁風閣と彫刻との融合による斬新で新たな空間体験と魅力的で親しみある美術体験を提供できればと願っています。

この展覧会のために日々新たな創作技法を開発中です。「現代の埴輪」が生まれてくることを願って粘土制作の実験的な試みが続いています。



図1 「仁風閣の樹下美人」チラシ表



図2 テラコッタ制作風景

石谷さんは、自身のテラコッタ作品を「現代の埴輪」にしたいと考えている。同時に「現代の樹下美人」も追求したい、とも書いている。木彫の仕事はかねてより続けられてきたものであり、「樹下美人」の連作も木彫で、1990年代以降に発表してきた。

ところがこのたびの記念企画では、その「樹下美人」を再び主題としながら、素材は粘土に絞るといふ試みを始めた。つまり「テラコッタ」という人の手による最も原初的な造形手法によって、自身の彫刻家としての理念の一つの具体化を図ろうとしているのである。広い視野を背景とした造形の前傾姿勢を崩さないできた、石谷さんらしい取り組みである。



「花の譜」

原初的である。しかし、埴輪でなければならぬ理由が彼の志向の中にあるようだ。例えば土偶の赤裸々な野趣性に比すると、埴輪の平安な優美さは際立って明らかになる。加えて鎮魂の静けさと誠実さが、埴輪の造形を特徴づけている。

果たして石谷さんのテラコッタの諸作も、その形体や表情、あるいは色彩において埴輪を想起させるに十分な柔和で清楚なものを有している。現代人の見失

「たち」のようなものを彼はそこに練り込めようとしている。モノづくりの原点となる感觸の快さと、思索の解放感に対する憧憬もあつたに違いない。

ところで、そのこと「樹下美人」とのかかわりにも少し私見でふれる必要がある。このたびの個展の主題とした「樹下美人」とは、テラコッタ作品としての樹下美人もあるが、表題通りの「見立て」による、「演出」としての樹下美人が主たる意味合いを持つものとして理解した方がよさそうである。

ことである。ついにながら「美人」とは、「美女」のことではなく、「女」のことである。中国唐代に発するこの様式は「樹下人物図」がもともとの型であることは周知の通りである。

しかしながら、石谷さんの「樹下美人」は今や人と自然の一体化へ向かってイメージが拡張されている。虹や月や雲が彫刻という形になって、木々と同様に愛らしく現れている。進化しているのだ。

(多摩美術大学客員教授、美術評論家・武田厚)

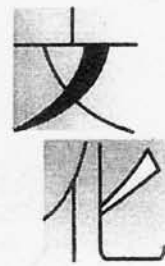
◇鳥取市文化財団10周年記念「仁風閣の樹下美人 石谷孝二加彩テラコッタ展」は1日から17日まで、鳥取市東町2丁目の仁風閣で。

「樹下美人」への思い

きょうから、仁風閣「石谷孝二展」

埴輪は古墳時代のものだから古くは文期の土偶の方がはるかに

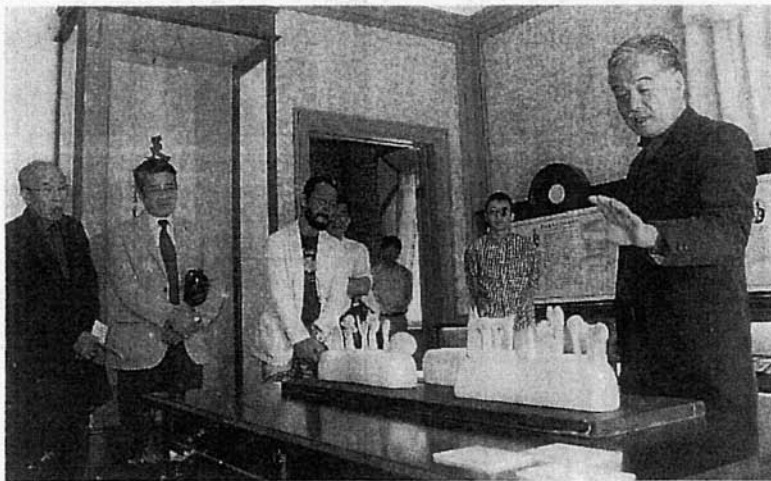
いし、土の造形であれば縄がちな「生命のかたち」、あるいは「生きる喜びのか



温かい造形の世界

鳥取の彫刻家 石谷孝二さん

仁風閣でテラコッタ展



来場者を前に自作について語る石谷さん(右)

彫刻家で、鳥取大学「長の石谷孝二さん(鳥取県芸術文化センター「取市高住」)の「テラコ

ッタ展」が、国指定重要文化財・仁風閣(同市東町2丁目)で開かれている。仁風閣を一つの森に見立て、森羅万象の中に生命の営みを表現した作品は建物の空間と調和し、温かな造形世界が広がっている。17日まで(12日は休館)。

テラコッタとは、粘土細工を素焼きしたもの。テラコッタ展としては約10年ぶりという今回は、女性胸像に鳥、花、月などを加えた「現代の樹下美人」20点を建物全体に配した。

柔らかなほほ笑みを浮かべる女性、胸元から羽ばたく鳥、久松山の月…。人と自然との共生を追求した作品は粘土ならではのぬくもりも加わり、まさに現代の埴輪のよう。

石谷さんは「樹下美人を生涯のテーマに、これからも制作を続けたい」と話していた。

(石河絢)

視点

してん

石谷孝二 加彩テラコッタ展「仁風閣の樹下美人」

いしたにこうじ
石谷孝二

(彫刻家/国画会会員/日本美術家連盟会員/鳥取大学教授・地域学部附属芸術文化センター長)

鳥取市にある国指定重要文化財の仁風閣は、フランスルネサンス様式を基調とした白亜の木造二階建ての明治洋風建築である。

旧鳥取藩主池田仲博侯爵によって、明治四十年五月鳥取城跡に別邸として建てられた。設計は赤坂離宮の設計で著名な建築家片山東熊によるものと伝えられている。

この仁風閣全館を使って平成二十二年十月一日から十七日まで個展「仁風閣の樹下美人―石谷孝二加彩テラコッタ展」を行なった。

この企画は財団法人鳥取市文

化財団十周年記念として鳥取市文化財団及び仁風閣主催で開催され、鳥取大学地域学部附属芸術文化センターが共催した。

今回の展覧会は洋館建築「仁風閣」の館内を森に見立て、各部屋、廊下、バルコニー、螺旋階段等のそれぞれ最も適したと思われる位置に「現代の埴輪」ともいべき女性胸像や月に照らされた山、虹のかかった湖などのテラコッタ作品二十点を展示した。テーマは九十年代から始めた「樹下美人」シリーズの再出発と位置づけた。

歴史ある建築空間と現代の彫刻作品の融合空間を作り出すことを目指して事前に館内全室の写真撮影、それをもとに作品の構想を練った。

平成十九年に行われた合同企画展「海と空と」で鳥取県内の美術館・博物館三ヶ所において一連の木彫大作を中心に発表したこともあり、今回は新作テラコッタに特化した。

二種類の粘土を一定の割合で混ぜ「ひも作り」や「タタラ作り」そしてその混合を用いて制作し、電気窯で九百度の温度で焼成した。

「現代の埴輪」が生まれてくることを願って粘土制作の実験

的な試みが続いたが、いつも必要に迫られて新たな技法を開発しながらの制作である。

「樹下美人」シリーズの作品群にインスピレーションを受けて作曲した新倉健氏のヴィオラ、ハープと弦楽オーケストラのための曲「樹下」がBGMとして流され、館内に差し込む自然光やタンダステン光に照らされた加彩テラコッタ作品は観る人を非日常体験へと誘ってくれたようだ。

素焼き(テラコッタ)に淡い彩色(加彩)を施すことで瀟洒な館内内部との親和性をはかり、粘土の持つやわらか味のある現代具象彫刻像によって魅力的で新鮮な空間を作り出すことを目指した。

期間中は予想以上に多くの入館者があり、好評のうちに幕を閉じることができた。



石谷孝二「花の籠」テラコッタ H40cm

潮流

舞台の中央には手作りの一本の白い木がライトに浮かんで立っている。モーツァルトが12歳で作曲したというオペラ「バスティアンとバスティアンヌ」の舞台が始まろうとしていた。舞台美術の依頼が音楽研究室の西岡千秋先生からあり、いよいよそのお披露目の本番が始まるのだ。一人の女性がさわやかなソプラノ



鳥取大学地域学部芸術文化センター長
・教授、彫刻家

石谷 孝二

の歌声とともに木のもとに佇んだ。

「樹下美人」というテーマが突然、脳裏に浮かんだ。この閃きに不思議な手ごたえを感じながら

から純情なラブストーリーの歌劇を眺めていた。もうずいぶん前のことになる。

は生命力を宿して繁栄する豊穡の象徴であり、樹の下は聖なる空間である。そこに佇むふくよかな美女はまるで花の精のようだ。

樹下動物園や樹下人物の歌劇を眺めていた。もうずいぶん前のことになる。そのイメージはそれぞれの風土と結びつき変

は生命力を宿して繁栄する豊穡の象徴であり、樹の下は聖なる空間である。そこに佇むふくよかな美女はまるで花の精のようだ。

樹下美人

試みの樹下美人がさまざまな形態とともに数多く誕生した。

樹下美人といえは唐の文化の薫りを伝える鳥毛立女屏風6扇(正倉院宝物)や中央アジア探検隊によって招来された樹下美人図(重要文化財)を思い浮かべる人が多いだろう。大地の中に根を張り、豊かに葉を茂らせ

花や実をつける樹木区切りに新シリーズを模

花や実をつける樹木区切りに新シリーズを模

索していた私は、アトリエで木彫による大きな一本の樹木をつくり、その広い台座の一角に四角い穴を割り抜き、鳥を持つ少女像「木精」をはめ込

み、第63回国展(東京都美術館)に出品した。樹下美人シリーズの第1作である。その後、新しい試みの樹下美人がさまざま

な形態とともに数多く誕生した。

いつも創作には発見の喜びがとれない、小さな発見の連続が創作の意欲を牽引してくれる。何気ない景色や人物の姿の中に新鮮な造形の秘密が隠れている。形の捉えの

発見が独自の解釈を生み出す。その解釈が独自の形を生み出す。その解釈が独自の形を生み出す。その解釈が独自の形を生み出す。

その解釈が独自の形を生み出す。その解釈が独自の形を生み出す。その解釈が独自の形を生み出す。その解釈が独自の形を生み出す。

樹下美人シリーズで

は、樹木のフォルムが作品を特徴付ける大きな要素になる。今まで見過ごしていた木の様相が見えだし、それとともに全く異なること、ここにもを創作すること、ここにもを創作すること、ここにもを創作すること、ここにもを創作すること。

予想もしない身の回りの事象の中に木の形を認め、その「見立て」を契機に作品の完成にいたることもあった。

観劇後に開いた個展を機に作品の完成にいたることもあった。

潮流



彫刻というものについて何も知らなかった学生の私は、大学の彫刻室に掛けられていたヘンリー・ムーアやマリノ・マリニーの彫刻写真に何か不思議な魅力を感じた。それは額に入った白黒の横たわる戦士のブロンズ像や崩れ落ちる馬に必死にしがみつくと人体の彫像写真である。生命感が人体の

鳥取大学地域学部芸術文化センター長・教授、彫刻家

石谷 孝二

構成を通して実感され、うと試行錯誤しながら造言葉を超えた直接的感動を覚えた最初の体験であった。

私が彫刻を志したのは立体のかたちを通して生きいきした本質的な何者かを生み出す可能性があったことを直感したからで

具象彫刻と一言で言っても単なる再現描写の彫刻には興味がほとんど湧かなかった。人形を通して時代感覚にあった新しい「いのち」の形を模索

いのちのかたち

ある。それは平面では得られない触覚的な感性の喜びであり、丸ごと捉え手ごたえであった。そして自分の興味の方向性が「現代の具象彫刻」にあることがはっきりと認識されるようになっていった。塊や空間によって根源的思考を具体化しよ

感謝している。一口に人体彫刻といっても優れた具象には必ず抽象性が内包されており、その世界が多様で奥深いものであることをあらためて実感できた。

その後、日本の彫刻の本流を体験すべく奈良に移り住んだ。仏像、とりわけ古代の仏像の中に「拙」の生命的な構造として象を内包した具象のかたち「いのち」のおおいな答えがあることを実感した。それらがギリシヤやエジプトの造形と並ぶ世界に自慢できるすばらしい造形であることに衝撃を受けた。

そして私の方向性は本当に自分の内部から出てきた形、日本人としての形を模索することにあると強く思うようになった。現代の彫刻として「自」然の生命的構造の中に「追」求すべき主題が隠されていることを意識するようになった。主題の範囲は人体を超えて広がっていった。作品の中には鳥が「いのち」の追求にほかならない。

(鳥取市)

彫刻創作の現場から 《テラコッタの章》

地域学部附属芸術文化センター教授 ^{いし}石 ^{たに}谷 ^{こう}孝 ^じ二

テラコッタとは粘土を焼いた素焼きのことをさしますが、作風の味わいがそのまま残るため多くの彫刻家が好んで制作しています。高温焼成による破損を防ぐため作品の内部に空気の抜け道を作ることや粘土の厚みを約1センチ以内にするなど特有の注意点があります。

今回は人物胸像を例に試行錯誤の中で探りだした作り方の一端を紹介します。

まず扇形の板状の粘土を作り、左右の縁同士を筒状になるよう張り合わせ、胸部の円錐形を作ります。その筒状粘土の内側に底から手を入れて、外側に圧を加えて肩のラインを作り、さらに胸のふくらみも内部から押さえて張りを持たせます。

別に作った顔面を接着し、後部をヒモ状の粘土で積み上げ頭部とし、胸像の基本的な形の出来上がりです。髪や帽子などをイメージに合わせて作り、手や花などその他の部分を取り付けて生命感のある形を完成させます。

テラコッタはその全体からにじみ出るおおらかな柔らかさが命と感じています。そのためには焼成時の色味や表面の肌合いはとても大事なので、現在は2種類の信楽粘土をブレンドし、オリジナルの粘土を手作りしています。

私はこの「現代の埴輪」に淡い色を施して仕上げ、加彩テラコッタと名付けています。



図1「赤い花」テラコッタH44cm



図2「木漏れ日」テラコッタ H43cm
(作品撮影：水本俊也)



開催データ

日時: 2010.10.1(fri)―10.17(sun)10:00-17:00

会場: 国指定重要文化財 仁風閣
〒680-0011 鳥取市東町2丁目1 2 1
<http://www.tbz.or.jp/>

主催: 国指定重要文化財 仁風閣
財団法人鳥取市文化財団

共催: 鳥取大学地域学部附属芸術文化センター
<http://www.tottori-artcenter.com>

関連事業:

オープニング 10.1 10:00～
ヴィオラ独奏／眞家利恵
ギャラリートーク／石谷孝二

レクチャー 10.10 14:00～
作品制作／石谷孝二

報道:

日本海新聞・FM山陰・仁風閣パンフレット
美術の窓・日本海ケーブルネットワーク

会場BGM:「樹下」 作曲／新倉 健



「仁風閣の樹下美人」報告書

石谷 孝二 加彩テラコッタ展

ISHITANI Koji Exhibition

2010.10.1 ~ 10.17

国指定重要文化財 仁風閣

発行日 / 2011年12月

